

## 金蔵寺

小塩山の中腹に位置する金蔵寺では、大原野地域の自然を楽しみながら境内を散策することができます。標高が高く、他の場所よりも早く紅葉するため、境内のもみじが赤やオレンジに色づく秋は特に人気があります。金蔵寺は718年に創建されましたが、応仁の乱（1467年～1477年）で焼失してしまいました。この地域の他の多くの寺院同様、この寺も第5代徳川将軍であった綱吉の母である桂昌院（1627年～1705年）の資金援助を受けて1691年に再建されました。

### 境内

金蔵寺の参拝は、仁王門をくぐり、石段を上がり、寺務所や鐘楼、池、そして護摩堂へ進むところから始まります。本堂はさらに石段を登った先にあります。その中には、本尊である十一面千手観音菩薩像（慈悲の菩薩）が安置されています。本堂は通常非公開ですので、人々はお堂の外から菩薩に祈りを捧げます。

本堂の西側には葉山神社と、桂昌院の髪の毛が祀られているとされている桂昌院御廟への道があります。本堂の東側には朱色の鳥居があり、勝軍地蔵菩薩像が安置されている愛宕大権現本殿へ向かう小道が続いています。もともと愛宕山で信仰され、火除けと戦勝のご利益があると信じられています。勝軍地蔵菩薩像は4月23日のみ一般公開されます。護摩堂には模刻が安置されています。

本堂から東へ少し歩くと、開山堂への階段と、八角形の石造りの囲いの中に下の川弁財天があります。道の突き当たりに展望台があり、京都盆地と周囲の山々を一望することができます。展望台の近くには、招き猫やぽっちゃりとしたタヌキの置物などの素朴な装飾が特徴の古い茶屋があります。寺院の境内では、他にも多くの陶器製のタヌキの置物を見ることができます。

### 自然景観を楽しむ

山腹に位置する金蔵寺は、自然や四季の移ろいを楽しむ場所として最適です。春には、池の傍にある桂昌院によって植えられたと言われている桜の木と山の斜面にある野生の桜が、風景に柔らかなピンクと白の色合いを添えます。境内や石段沿いに植えられた多数のもみじの木は、春から夏はエメラルドグリーン、そして秋にはオレンジ、赤、黄色と鮮やかに色づきます。

注意事項：雨の日の山道は滑りやすく土砂崩れの可能性もあるので、悪天候時の参拝は避けてください。